

日本心理学会若手の会

JPA Early Career Psychologist Network



NEWS LETTER

Vol.4 No.1 2019



CONTENTS

- ・ 第4回異分野間協働懇話会開催報告
- ・ 日本心理学会第83回大会若手の会企画のお知らせ
- ・ 私のキャリアパス（高瀬堅吉先生・自治医科大学・教授）
- ・ 活躍する若手！（伊藤資浩さん・北海道大学、岡村靖人さん・追手門学院大学）
- ・ 編集後記

第4回異分野間協働懇話会開催報告

＜第4回若手の会キャンプセミナーの報告＞

若手の会では、ヒューマンインターフェース学会 若手の会と共催で、毎年3月に「異分野間協働懇話会」という合宿形式のイベントを行っています。これは、若手心理学者が分野や研究・実践の枠にとらわれず、自由に意見の交換を行う場を目指し、2015年度にスタートしました。2019年は、3月4日から1泊2日の期間、アピカルイン京都で開催し、全国から49名の参加がありました。今回は特に学部生の参加が多く、まさに「若手」の斬新な意見が飛び交う会となりました。

1日目は、ポスターセッション、ヒューマンインターフェース学会の紹介、招待講演、情報交換会を行いました。ポスターセッションでは、15件の発表があり、途切れることのない活発な議論が行われました。ヒューマンインターフェース学会の紹介では、若手のメンバーが工夫をこらした多彩な企画に取り組んでいる様子が紹介されました。

招待講演では、立命館大学の北岡明佳先生に

「動物心理学から錯視の研究へ」というテーマでご登壇いただきました。北岡先生が考案された有名な錯視のご紹介から始まり、錯視研究をどう社会に生かしていくのか、企業とのコラボレーション等、普段はなかなか聞くことができない貴重なお話を伺うことができました。

情報交換会は、1日目の最後に会席形式の夕食とともに行われ、各テーブルで研究や実践の枠にとられない意見交換が行われていました。



(ポスターセッションの様子)

2日目は、2018年に博士課程を修了された方2名と修了後5年以内の方1名の計3名の先生方に講師としてご登壇いただき、研究公表会を行いま



(1日目の招待講演の様子)

した。京都文教大学(現:広島文教大学)の住岡恭子先生には「臨床と教育と研究のはざまでの“なまけ”」、千葉大学の村田佳代子先生には「皮膚感覚ベクションの概観」、静岡大学の古見文一先生には「他者の心の理解に影響を及ぼす要因の多面的検討」というタイトルで、博士論文から現在までの研究とその変遷についてキャリアパスとともにお話していただきました。



(2日目の研究公表会の様子)

ご登壇いただきました先生方をはじめ、ご参加いただきました皆様、誠にありがとうございました

た。さて、2020年は3月9日から1泊2日で埼玉県での開催を予定しております。ぜひご参加ください。

(宮坂 真紀子・久永 聡子・中川 裕美・
瀧澤 颯大)

日本心理学会第83回大会若手の会企画の お知らせ

<若手のワンショット発表会>

日時：2019年9月11日(水)9:30-11:30

(大会第1日目)

会場：立命館大学 大阪いばらきキャンパス(OIC)

A棟2階/第11会場AN210(予定)

大会初日に自分の演題について、発表とは別に短時間で発表する機会を設けます。各自の持ち時間は1分間。いかに自分の研究を短時間でアピールするか?発表者、聴衆双方にとって刺激的な時間になると思います。たくさんのご来場をお待ちしております。

<学部生・高校生プレゼンバトル>

上記のワンショット発表会と同時開催で、学部生・高校生の発表機会も用意しました!内容は、研究計画や卒論の中間発表など、これから取り組もうとしている、または、すでに取り組んでいる内容を5分程度でいかに魅力的にプレゼンテーションできるかを審査し、ベストプレゼンターを選出します。院生以上の皆さまにとっても研究の萌芽、未来の共同研究者を見つけるチャンスです。また、お近くにご関心のある学部生や高校生がいましたら、ぜひご紹介ください。

<若手の会企画シンポジウム&進路相談会>

「日本心理学会若手の会企画シンポジウム：若手心理学者の活躍する場・国立の研究機関から民間企業等の新しい活躍の場まで」

日時：2019年9月12日(木)13:20-15:20

(大会第2日目)

会場：立命館大学 大阪いばらきキャンパス (OIC)

A棟2階：第6会場 AC231

これから就職する若手会員に向けて、大学以外で活躍する若手研究者の方から現職に至った経緯や現在の活動について話題提供をしてもらいます。そして、心理学者の活躍の場の展望性やどの様に心理学を一般社会へ発信していくかを議論していきたいと考えています。企画終了後には、同会場でシンポジストを含む若手の会会員による進路相談会を行います。今年度は個別相談にも対応する予定です。

(前田 駿太・三浦 佳代子)

私のキャリアパス

第5回 高瀬 堅吉 先生



高瀬 堅吉 先生
(自治医科大学・教授)

【ご略歴】

- 2004/3 横浜市立大学 大学院医学研究科修士課程
医科学専攻修了
- 2004/4 横浜市立大学 医学部 医学科 生理学教室
助手
- 2008/4 姫路獨協大学 薬学部 医療薬学科
生理学教室 講師
- 2010/10 筑波大学 大学院人間総合学科研究科
感性認知脳科学専攻 博士 (行動科学)
取得

2011/4 東邦大学 医学部 医学科 解剖学講座
微細形態学分野 助教

2013/8 東邦大学 医学部 医学科 解剖学講座
微細形態学分野 講師

2014/8 自治医科大学 医学部 医学科
心理学研究室 教授

【つながることにつながったキャリアの点と点】

今回、「私のキャリアパス」を執筆する機会をいただきました。何を隠そう、このコーナーを考案したのは、当時、若手の会の幹事だった私です。このコーナーで様々な方たちのキャリアパスを紹介し、今の若手の方たちのキャリア形成に役立つ情報を提供したいと考え、ニューズレターの中に、このコーナーを創設することを当時の幹事会で提案しました。まさか、自分が書く機会を頂けるとは思っていませんでした（若手の会委員会のみなさん、ご依頼くださり、ありがとうございます!）。今回、私が書く「私のキャリアパス」が、若手のみなさんの参考になるかどうかはわかりませんが、「これを読んでいる若手心理学者にとって、役立つ情報になってほしい!」という思いで、飾らず、気取らず、率直に書いていきたいと思えます。

私の経歴は Researchmap (<https://researchmap.jp/takase/>) で紹介されている通りです。その経歴を見た方からよく言われるのは、おおよそ次の三点です。1) 修士課程を修了して、すぐに助手になったことがすごい、2) ポスドクを経験せずに各所を転々としながらキャリアがつながっていることがすごい、3) 30代で医学部の教授になったことがすごい。また、この経歴を見た方の大半は、「この人は強大なコネクションを持っていて、それを利用して、すいすいっと職を得たんだろう」とか、「色々な所で非常勤講師や客員研究員もやっているし、きっと人間関係形成のスキルが半端ないから、それを使って、すいすいっと職を得たんだろう」とか、「学会等で委員とかをたくさんやっているし、そこでガツガ

ツ社会活動しているから、すいすいっとキャリアを築けたんだろう」とか、「共同研究者も多いし、やっぱり人脈がすべての人なんだろう」とか、私自身の研究力や教育力に帰属しないかたちで、「私のキャリアパス」を楽しく語ってくれます。確かに、私のキャリアパスは、タイトルにもあるように色々な人とのつながりの中で築かれたものですが、そのつながりはとても清々しいつながりでした。いわゆる「コネ」や「人脈」という昔ながらの言葉が醸し出す、発酵臭（腐敗臭？）を帯びたつながりではありませんでした。もっと突っ込んで言うと、「八方美人でへこへこして、上の立場の人から言われたことをほいほいとやったから、ポジションを獲得したわけではない」ということです。そんなことでポジションを獲得できたら、そりゃ苦労しません（笑）。もしそうだとすると、若手の会の活動も、お酒の注ぎ方や、お世辞の言い方などのワークショップをやっていたらいいわけです。確かに、コネや人脈で職に就いた人はいます。でも、それは今の時代では通用しない少数派の希少サンプルです。もちろん、心理学者も社会の中で活かされている存在なので、社交性があるのに越したことはないのですが、本当に必要なことは、研究力と教育力、そしてそれらを示す成果だということ揺るぎない事実です。以降、私の履歴を振り返りながら、これについて触れていきたいと思えます。

まず、修士課程を終えて、すぐに助手になった経緯ですが、ちょうど私が修士課程を修了する際に、当時、その研究室の助手だった先生が辞めることになり、後任人事を行っている最中でした。その研究室の修了生を含めて候補はたくさんいたのですが、私に白羽の矢が立ったのは、朝は8:00から夜は11:00まで、364日（夏休みを1日除く）、ひたすら研究している姿を、当時の研究室の教授が見ていたからです。ワークライフバランスなんて一欠けらもない生活です。もちろん、それでいまいちだったら採用されなかったと思えます

が、修士課程のあいだに、国際誌に掲載可能なデータをわんさか取得出来ていたことと、学会発表や修論発表でのプレゼンが良かったことが採用してもらった理由かなと自分では思っています。つまり、この時は業績がなくとも、伸びしろを感じさせるようなパフォーマンスを、2年間にわたり身近で見せ続けられたから採用されたわけです。

しかし、得られたポジションは任期制だったので、数年後には次に移らなくてははいけませんでした。そのため、次の職を探して（もちろんポストクのポジションも含めて）、いくつか応募していたのですが、その過程で「新設大学で研究室を開設するから講師として来てほしい」という連絡を急にいただきました。研究室を開設した方が、たまたま、私が修士課程、助手と在籍していた研究室のお隣の研究室でスタッフをしていて、その方が教授として栄転された際に、「自分の研究室を立ち上げる段階で踏ん張れる人が欲しい」ということで、私に声をかけてくれました。声をかけてくれたのは、助手になってからの数年間、隣の研究室から私を眺めていて、それなりの国際誌に、論文を着実に最低でも一年に一報のペース出していて、競争的資金もきちんと獲得して、何よりもせっせと研究活動をしていることを、その方が目の当たりにしていたことが理由でした。

その方の研究室に移ってからは、立ち上げた研究室の研究テーマに従事する傍らで自分の研究も行い、いずれのプロジェクトでも成果を出しました。ここは任期制ではなかったもので、いつまでもいることができました。ただ、プライベートで、2歳の長男の育児に加えて双子を授かり、実家の近くでないと仕事との両立が立ちいかない状況になったので、実家の近くから通える大学でポジションを探すことになりました。都内を中心に公募を出したので、やはり競争は激しかったです。気づけば50件ほど出していました。そのうち、最終審査まで進んだのが5件、内定もらったのが3件です。落選のたびに何が敗因だったかをとことん

フィードバックしました。そこからわかったのは、自分はどの人事と相性がいいのか、そもそも自分の特性(強み)は何か、その強みの売り込み方は、どうしたら良いものになるのかという三点でした。売り込み方に関していうと、自分のストーリーをきちんと説明できることが大切だと思いました。考えてみれば、行き当たりばったりのキャリア形成でしたが、自分の研究テーマとはぶれない形で、その行き当たりばったりの出来事を適時解釈していき、飛び込み仕事も自分の中のストーリーとして昇華していくことで、自分の研究歴をつなげていったように思います。そうやって歩んだキャリアのストーリーの部分は、研究室のホームページにコラムとして書いています(<http://www.jichi.ac.jp/psychology/mind-and-science.html>)。

次に、現在のポジションに就くときのお話です。これも公募でした。30代で自分の研究室持つことで、まずは自立した研究者としてのスタートラインに立ちたかったので、いつも JREC-IN (<https://jrecin.jst.go.jp/seek/SeekTop>) をチェックしていました。今のポジションは、そこで見つけた公募だったのですが、見つけた時に、「どうかなー? いけるかなー?」と2日間ほど考えました。その2日間で行なったことは、単にぐるぐると悩む作業ではなく、自分の業績(論文の引用数、競争的資金の獲得数)、これまでの背景(医学部に在籍した期間の長さ、臨床の資格も持っている等)を、この公募に出しそうな複数の研究者と比較して、その中で、自分の位置を客観的に把握することでした。そして、「いけるかも!」と思って応募する決断をしました。もちろん、その際に公募に出すことについて、周囲に相談はしたのですが、「医学部の教授だよ? 無理無理(笑)」なんて言う方が大半でした。ただ、自分の状況把握がそこまで間違っているとも思ってなかったのが、「出すのはタダ(無料。ただし郵便代はかかるけど)！」と、思い切って出したら、なんとまあ、通

りました(ばんざーい)。ここで感じたことは、バイアスで自分の限界を決めないことの重要性でした(もちろん、落ちたら落ちたで「身の程を知ること重要」という学びになったのだと思います)。

先日も、とあるインタビューで、30代で医学部の教授になれたのはなぜなんですか? と聞かれました。ここで書かせてもらったことをかいつまんでお答えしたのですが、その時に伝えたのは、マッチングがぴったりならば、純粋な公募では負けません、ということです。世の中には、どうも採用予定者が決まっている純粋ではない公募があるようです。ただ、その人事の担当者に聴いても「絶対に公募です!」と言い張られるとは思いません。一方で、純粋な公募が存在するのも事実です。その公募で勝ち残るためには、とにかく自分を磨いて磨いて、独りよがりにならずに、研究者として、大学人として求められることをひたすらやるしかないのかなと思います。そして、それをやっていけば心理学の分野であれば、数学や哲学等の分野のポジション獲得競争とは違って、競争具合は中程度なので、自ずと道は開けると思います。

では、「求められることをひたすらやる」の「求められること」とは何でしょうか。まず、研究者として求められることは、当たり前ですが、研究資金を獲得して、研究を立案し、それを実施して、得られた成果を国際誌に論文として出版することです。心理学も分野が広いので、日本語の著書でワーッと書くとそれが業績になる分野もあるみたいです。ただ、知識の公共性を基準に「研究」という営みを考えたら、世界発信が標準でしょう。あと、書いた論文の本数を自慢する人がいるのですが、書いても引用されないような論文は情報としての価値が低いと個人的には思っているので、自分としては引用数をとても気にしています。ヒット作、つまり、めちゃくちゃ引用されている論文を出している研究者を、自分はかなりリスペクトしています。そのため、研究力という点でh指数は参考にすることが多いです。もちろん、この指数の性

質を考えれば、同じ研究分野における研究者同士の比較での参考という意味です。

次に、大学人として求められることについてです。これは、上記の研究力に加えて、教育力や、社会貢献力だと思います。教育力は、これまでの担当科目数で見ることができるでしょうか。あとは模擬講義をさせてもらえるなら、それで推し測ることもできます。また、社会貢献力は、一般書の出版数や学会の委員会を引き受けている数などで見ることができるでしょうか。「学会の委員って、時間を食うだけでできればやりたくないな」って思う人がいるかもしれません。でも、学会の委員等を引き受けていない人は、「きっと、大学に入っても学内業務をやってくれないんだろうな」という印象を持たれると思います。学会の業務も学内の業務も、そのコミュニティ、組織を成立させるために必要な業務です。「研究をやって、教育は、まあ、研究に差し障りのない範囲で無理のない程度に。あとは知らないよ」なんて人は、同じ職場で働く仲間として、ちょっと扱いに困りますよね。もちろん、「研究だけやっていてください」なんて職場は天国ですが、大学に勤めたいのであれば、大学は研究機関としての側面以外にも、教育機関、社会貢献を行う機関としての側面も持つので、そこを理解して自分磨きをしなくてははいけません。私は大学で心理学者として研究するポジションを得るために、研究力以外にも、教育力、社会貢献力についても同様に、上記の指標を参考にして自分を磨いてきました。

では、どうやって非常勤講師のお誘いや、共著のお誘い、委員就任のお願いなどで声がかかるのかという点ですが、これは色々なところで自分の「心理学愛」を伝えたからだと思います。例えば、学会の懇親会の席で、その他、先生方とお会いする様々な席で、自分は心理学が好きで、こうしていきたい、ああしていきたいなんてことをしゃべっていると（わざとらしく喋っていたわけではなくて、本当に好きなので、そのような場では

自然とその話になりました）、不思議といろいろとお誘いが来るようになりました。最初はぼちぼちと来ていた依頼ですが、それらについてきちんと期日を守って、それなりのクオリティ（？自分ではわかりませんが、褒められることが多いです）のものを為し続けていると、「この人には頼める！」という風評が伝わるようで、非常勤講師や出版依頼、学会の委員等の依頼がだんだんと増えてきました。要は、いつでも評価されているという意識を持って、一生懸命に頑張ることが大切だということありきたりの結論です。もちろん、一生懸命の方向を間違っただけではいけません。研究所に職を見つけたければ、あたりまえですが、しっかり研究して論文を発表する。大学の教員になりたいければ、研究以外にも、教育、社会貢献の実績をバランスよくつむ。そして、実践家になりたいければ、その領域での実践歴を重ねるというのが、いわゆる「正しい一生懸命の方向」だと、私は思います。

また、「活躍の場」というのは人（社会）から与えられるものなので、与えられた場所で一生懸命やると、関心を持ってくれる人が必ずいます。自分勝手に「活躍の場」を選び好みしていると、きっとみんなからそっぽを向かれて、最後は「はい、おしまい」というかたちでキャリアが詰んでしまいます。そういう人を、私は同世代でたくさん見てきました。与えられた場所で、一生懸命やる。この当たり前のことを継続し、その過程で私は色々な人たちにお世話になりました。その人たちとの出会いの一つ一つがいつの間にか、「あ、高瀬なら知っているよ」というネットワークになって、今度は私のキャリアの点と点をつないでくれました。ここに来て、内容を強引にタイトル寄せて行っている感がありますが、とにかく、若いうちはあれこれ選んでないで、与えられたものをしっかりやる、これが大切でしょうか。そして、自分の思いを、いろいろな人に伝えるために懇親の場に積極的に出ていく。そうすることで人とつながり、つながることで逆につながった自分のキャリアの点

と点が、振り返ってみると「キャリアパス」になるのだと私は思います。

この文章の最後に、私のキャリア形成の過程でとてもお世話になった方たちを紹介させていただきます。はじめに、学士、修士、博士の取得にあたり、たいへんお世話になった藤健一先生、田中富久子先生、一谷幸男先生。次に、私に心理学者としての道筋を与え、悩める時に温かいまなざしで私を見守ってくれた杉岡幸三先生。そして、その開かれた道筋が閉じないように、今でも様々な面で私を支援してくださる津田彰先生。最後に、喧嘩しつつも冗談を言い合える同士、鈴木華子先生（この人がいないと、きっとこの仕事の張りは30%減です）。その他、ここで名前を挙げきれませんが、本当にいろいろな人が私のキャリアパスをつなげてくれました。この場を借りて感謝申し上げます。それでは若い心理学者のみなさん、皆さんのキャリアパスが良い形でつながるように、私も尽力していきますので、学会で見かけたら、ぜひ声をかけてください！ 長文失礼しました。

、、、と、ここで終わるはずだったのですが、最初に原稿を読んでくれた若手の会委員会のみなさんから、時間のやり繰りについてご質問を頂きましたので、最後にそれを書いて終わりにしたいと思います。仕事の生産性をあげるコツは（と言っても、自分の生産性が高いという自覚はないのですが）、無駄な時間をつくらないことです。移動中も（満員電車の中でも）、何か進められる仕事があるので、それをひたすらやり、ぼーっとしない。今の職場もそうですが、仕事遅いなって人は、たいてい何か無駄なこと（おしゃべり等）に時間を消費しています。超集中すれば、たいていのことは業務時間内に終わります。あと、家族との時間もすっかり過ぎさないと人生が豊かにならないと私は思っているのです、仕事ではない時間はメリハリをもってプライベートを楽しみます。そして、生産性をあげる一番のコツは、仕事をできるだけ楽しむ

ように心がけることです。楽しいことは進みます。なので、もし今研究が楽しめていないなあって思う人は、テーマを変えとか、視点を変えとか、研究者の道を変えとか、工夫ができるうちに、いろいろと工夫するのが良いと思います。一度きりの人生ですから、楽しまないで損です。それではこれで本当におしまいです。とても長い文章を読んでくださりありがとうございました。

「活躍する若手！」第5回
伊藤さん（北海道大学大学院）
岡村さん（追手門学院大学大学院）



伊藤資浩(いとうもとひろ)さん
 （北海道大学大学院・博士課程後期）

私の専門は認知心理学で、注意、メタ認知、魅力などの研究に従事してきました。このような機会を折角頂いたのですが、今回は私の研究については掘り下げず、今年度が最終年(のはず)である一学生の想いを綴りたいと思います。

このような記事を書くときに、私は毎回悩んでしまいます。それは、過去の記事にあるような研究者の方々とは違って、私には情熱的な想いがあってこの道に来た訳ではないからです。テレビで見ている楽しそうだなと心理学の門戸を叩き、学部2年になってようやく、心理学は認知実験とやらがあるのだなと思ったくらいに関心がありませんでした。そんな私でも、河原先生(第2回「私のキャリアパス」参照)の講義を受けたのをきっかけに、サラリーマンをするより面白そうだなと、好奇心のみでこの道に進みました。それ以降

の経緯は飛ばしますが、せっせと博論を書いている現在があります。

この進路が良かったとか間違いとか本当の意味で分かるのは、まだまだ先のように思えます(いつなんですかね?)。今後の進路に不安があって、辞めていく優秀な先輩を見て、就活しようと思ったこともあります。進路に関する不安や悩みは、同じ学生同士でも意外と話しづらいように思います。この業界にいる人は物凄い夢や希望を持っている人だけではないのだなと思ってくれれば幸いです。ただ、自分が面白いと感じることを主体となることができる仕事は他にあまりないように思います。その感情やこれまでの経験を無視することはあまりに惜しく、まだまだ楽しく頑張れそうです!



岡村靖人さん
(追手門学院大学大学院・博士後期課程、
日本学術振興会)

昔を振り返れば小さい頃から知的な香りに憧れていたからでしょうか。研究者という職業に漠然とした憧れがありました。英語が好きだったので、言語学者を目指して外国語学部に進学しました。そこで認知言語学という学問に出会い、言葉を話す人間の主体性に興味を持ち始めました。大学院から心理学に転向して今に至っています。

現在興味を持って取り組んでいるのは、私達の認知が身体経験に基づいて生じるという「身体化認知」という領域です。特に、物の形と社会的判断の連合に関して研究しており、対人認知において丸い形が社会的な温かさ認知を、四角い形が有能

さ認知を促進することなどを明らかにしてきました。この領域は近年、再現性問題で特に槍玉に挙げられることが多く、肩身の狭い思いをすることもたまにはありますが、とてもホットな領域なので興味のある方がいればぜひお声がけください!

今この原稿を書いている時点で(2019年8月)、私は博士後期課程3年生であり、博論執筆に追われております。若手研究者を巡るアカポス競争の熾烈さに関しては様々騒がれていて、私自身、博士号を今年度で取得できたとしても来年度からの身分は全く未定です(どなたか良い話ありませんかねえ・笑)。でも、愚痴っていても始まらない! 若手の皆さん、今の研究に全力で取り組んで楽しみましょう。そして、日本心理学会若手の会のイベントや学会、研究会を通して活発な交流を図っていただけると幸いです。知的好奇心が擦られる、そんな刺激的な時間を皆さんと共有できたら嬉しいです。

編集後記

今号は、第4回異分野間協働懇話会の開催報告、日本心理学会第83回大会若手の会企画のお知らせ、私のキャリアパス、活躍する若手!と盛りだくさんで掲載させて頂きました。

私のキャリアパスを執筆してくださった高瀬先生からは、他ではなかなか聞けない現実に即したリアリティーのあるお話を聞かせていただいたような気がします。また、活躍する若手!のお二人も今後の就職が気になっているように見受けられました。日本心理学会第83回大会若手の会企画シンポジウムでは、国立研究所や民間企業で活躍される4名の若手研究者の方に講演をして頂きます。研究者の活躍できる場所に興味のある方は、このシンポジウムに参加されると、様々な場所での研究者の一面が見られると思います! また前年度好評をいただいた学部生プレゼンバトルに引き続き、今年度は高校生もプレゼンバトルに参加が可能です!

大会前日の9月10日にはプレコンベンション学術交流会があります。各賞の授与式や日本心理学会会務報告があり、会員は申し込みをすれば参加が可能です。若手の会幹事も数名出席致します。詳しくは以下のURLをご覧ください。

https://psych.or.jp/jpamember/pre_con2019/

プレコンベンション学術交流会に引き続き会員親睦会（立食形式）があります。その後に、若手間の交流を広げるために、若手の会でも親睦会を開催します。こちらの親睦会に参加を希望する方は、担当の佐藤徹男（tetsuo-sato@ts.siu.ac.jp）までご連絡ください。皆さんの参加をお待ちしています。第83回大会（立命館大学）でお会いしましょう！

（佐藤 徹男）

発行：若手の会幹事会
〒113-0033 東京都文京区本郷
5-23-13 田村ビル内
公益社団法人日本心理学会事務局
ips-ecp@psych.or.jp
2019年8月21日発行
編集：若手の会幹事会